

和朝

今昔物語

卷之五
世俗部

五



今昔物語部 五目錄

部

尾州
仙架屋
名吉屋

○世俗傳

一 将門純友謀叛伏誅諸



今昔物語部 五目錄

今昔物語 倭部五

○世俗傳

一 將門純友謀叛伏誅諸

此段本文乱脱。齟齬不少。以故参考將門記等諸實録。改記如左。文義与本書大異者。夫思之。

今いけり。古一代朱雀院御宇。延暦四年に
と陽南海の海賊ゆりて。國民とあやみしふ
よりて。官兵とけりて。あやみしふ。首
をまけり。あやみしふ。同六年六月。南海の張本
者。京の純友。伊豫掾從五位 下。良範。男。あやみしふ者。其黨あやみし
外。位。國日。純友。千餘艘の

今昔物語 卷五

上野守に官物にたてしめられたるは

ちづじへまうして。紀淑人長谷雄男を位縁守従四位下

やしてはういさる。は淑人任ぜともりく萬氏を

まうきうべ。海賊どもちづくちづまりたり。同

年七月下旬淑人純友と相とるまひて上洛と

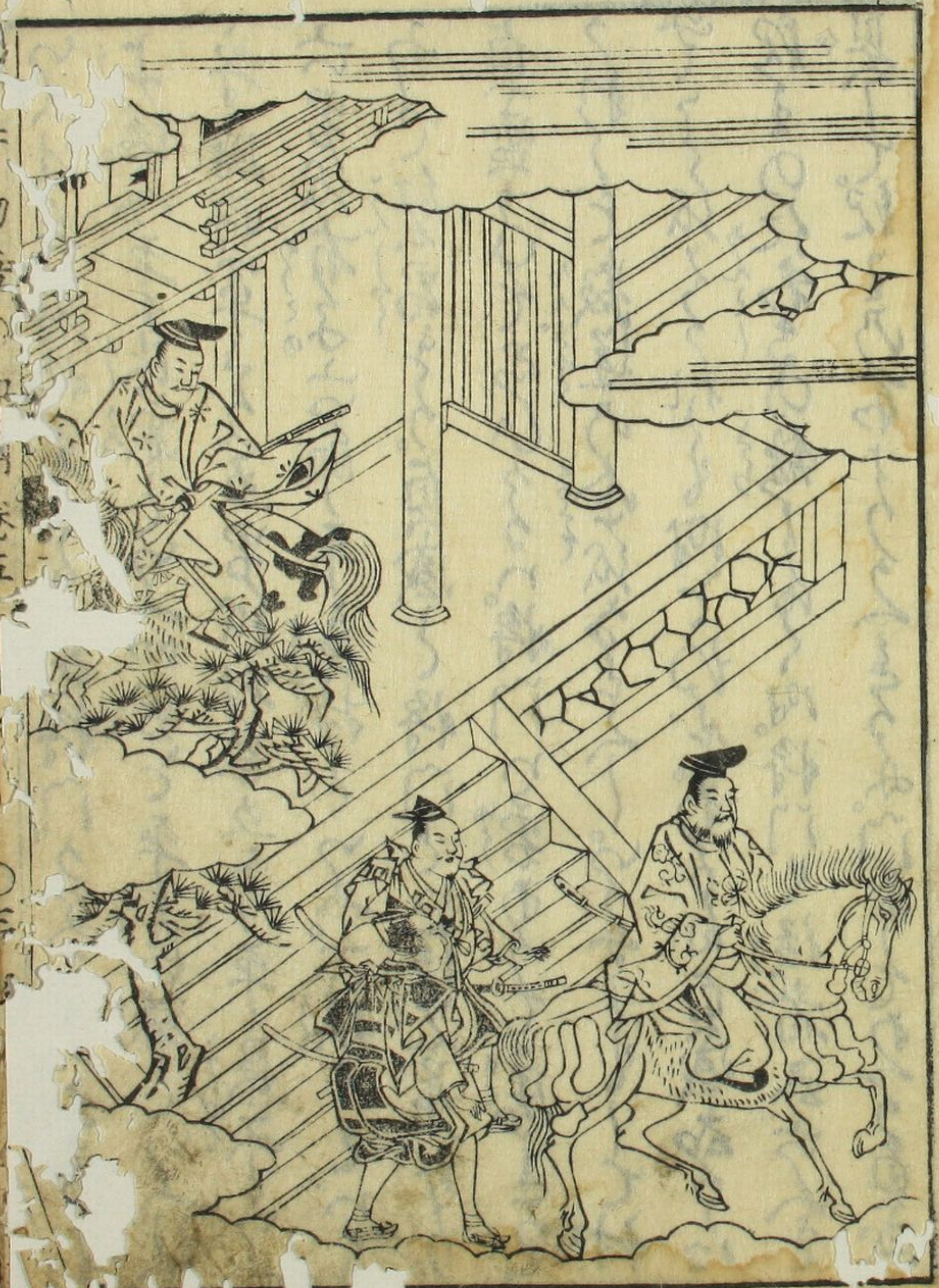
うのころ下総國任人相馬小次郎平将門滝口

将と在系と。は将門が先祖ハ桓武天皇より

三代高見王の一男。高望王ハ六人れ子あり。一

男公平良望と。後ハ國香とわく。結守

府將軍ふのしやうぐんたり。貞盛が父なり。次男公平良將



... 将門の... 上総... 守府將軍... 六男... ありて... 貞盛... かく... 親王の... 具して...

親王... 将門... 彼... 貞盛... 貞盛... 将門... 貞盛... 貞盛... 貞盛... 貞盛... 貞盛...

いさふお志をたて、新あめ森の中は休一
本陣よのこしを於集とあまこあふふもたて、
方了りごしとむ。奥司これとあつごうやごうあ
里人多うて将門が参込いごてのづれごうようを
西司よたぐ。奥司これとあて候じごうばもたて
おのつごうとやごて。何のさかりさくごうもの
とつごうと。備をさるごうてこれと退ごう二十餘町
ふらご。将門が休兵のあよ退あら。おつ敵とごう
あつごうごうて。軍まははごうて。敵の陣を
火攻ごう。西司陣をの放火ごうて。清方の中

及木のあつごうて。放火ごうかごあ中じあよ。たご
森の中ら。お門軍と候報ごうてごうごうて
するごう。西司これとあて。さごうこれとあ
ごうい。奥をさるごうごうあ中ごうんとするごうごう
林中ごうごう。西司の勢りごうごうごうて相ごう
あつごうごう。西司の勢りごうごうごうて相ごう
ごうごうごう。お門が軍まははごうて。二十餘町
ごう。息ごうれ氣ごうつごうて。しごうごうあ
ごうごうて。相馬勢ごうごうごうごうごう
ごう。奥侍ごうごう。西司のうごうごうごう

護上 右政大臣少将同賀息可

や書りもりも。これよりして。将門追討の事

多。法神社へ祈りて。神宮雜事記曰。天慶三年二月九日。被進於二所太神宮。

種々神宝物等。是彼東賊平将門西賊藤純友可被追討之由。依祈禱也。使参議從三位大中臣宗主頼基守也。同日三

年正月十一日。右政官符と。東海東山道の國司。此

と。はりて。討功あり。常には。ふらの愛を。加らる。さ

き。由。然。下。知。さ。る。負。外。從。五位。下。左。大。史。尾。張。

宿。祿。言。證。右。中。兵。部。少。位。下。兼。右。内。務。少。源。經。基。

相。織。守。り。と。左。政。官。符。本。朝。文。粹。二。見。多。考。へ。し。げ。ら。れ。武。藏。少。源。經。基。

貞純親王男。六孫王天福五年六月十五日。始賜源姓。鎮守府將軍武藏下野信濃伊豫上野等守正四位上太宰大貳式部

左内藏頭兵部少輔所謂源氏之正統也

任國。居れ。あら。ら。り。し。た。上。原。

て。將門が謀逆の。了。ら。ぬ。妻。岡。と。これ。よ。り。し。て。位。を

さ。げ。さ。る。ふ。一。本。曰。武。藏。少。源。經。基。は。さ。ら。り。て。ま。る。の。り。り

叛。逆。と。し。妻。岡。と。お。廷。し。り。り。武。藏。少。源。經。基。と。の。り。し。て。將。門。を。討。つ。由

を。し。て。常。陸。下。総。三。州。武。藏。上。総。み。ま。の。院。判。け。國。解。と。さ。り。て。と。る

ら。い。て。其。首。と。さ。り。常。陸。南。海。山。陽。各。の。國。に。行

て。官。物。を。お。さ。り。り。官。舎。を。や。ら。り。將。門。が。謀。反

れ。り。と。聞。て。さ。あ。の。が。ん。と。後。と。備。あ。り。干。高。き

白。狐。妻。岡。を。ん。ご。り。り。十二月。下。旬。妻。子。を。お。さ。り。り

ふ。陸。路。より。上。洛。と。純。友。を。討。つ。事。を。進。め。り。り

頼朝。平高日子を討つ。文永三年。頼朝、先を那に
波驛に相とて。けしきだ。のむけは。頼朝
并に文元以下討死と。平高日子の討死。耳鼻
をそげて退散し。れが妻とて。しりて引入。播
磨。少治。由惟幹とて。あつく生捕。南海とあつた。
陽。山陰。あぬを。くむりんと。頼朝、頼朝、頼朝、
在。京。して。比。敵。し。の。り。て。運。兵。頼。朝。一。平。年。年
中。より。頼。朝。の。関。東。へ。せ。し。と。頼。朝。の。侍。あ。あ。あ。あ。
蜂。起。し。け。り。今。年。の。頼。朝。あ。あ。あ。あ。あ。あ。一
夜。よ。か。ら。ん。て。天。下。の。頼。朝。し。わ。ら。し。り。同。三。年。二

月將門純友討つ。とて。平高日子を討つ。文永三年。
平高日子を討つ。文永三年。頼朝、先を那に
波驛に相とて。けしきだ。のむけは。頼朝
并に文元以下討死と。平高日子の討死。耳鼻
をそげて退散し。れが妻とて。しりて引入。播
磨。少治。由惟幹とて。あつく生捕。南海とあつた。
陽。山陰。あぬを。くむりんと。頼朝、頼朝、頼朝、
在。京。して。比。敵。し。の。り。て。運。兵。頼。朝。一。平。年。年
中。より。頼。朝。の。関。東。へ。せ。し。と。頼。朝。の。侍。あ。あ。あ。あ。
蜂。起。し。け。り。今。年。の。頼。朝。あ。あ。あ。あ。あ。あ。一
夜。よ。か。ら。ん。て。天。下。の。頼。朝。し。わ。ら。し。り。同。三。年。二

頼朝。平高日子を討つ。文永三年。頼朝、先を那に
波驛に相とて。けしきだ。のむけは。頼朝
并に文元以下討死と。平高日子の討死。耳鼻
をそげて退散し。れが妻とて。しりて引入。播
磨。少治。由惟幹とて。あつく生捕。南海とあつた。
陽。山陰。あぬを。くむりんと。頼朝、頼朝、頼朝、
在。京。して。比。敵。し。の。り。て。運。兵。頼。朝。一。平。年。年
中。より。頼。朝。の。関。東。へ。せ。し。と。頼。朝。の。侍。あ。あ。あ。あ。
蜂。起。し。け。り。今。年。の。頼。朝。あ。あ。あ。あ。あ。あ。一
夜。よ。か。ら。ん。て。天。下。の。頼。朝。し。わ。ら。し。り。同。三。年。二

室の下野押領使儀者者東渡部といふまゝ
 わりかまひ大藏冠通足公より八代を次ぐ藤村雄
 が子なり。若くは人よりえん。其のたれよなりしり
 たりくら。我お門といふ。ての家のとてよき。目
 本といふ。いふ。んとや。し。将門が館。いふ。て
 對面し。其辭と。う。う。ぬ。其。若く。あ。う。う。ゆ。ん。
 をくら。本代。いふ。翻。下野。國。ぬ。う。て。常陸。掾
 平貞盛。と。平。を。いふ。談。話。と。貞。盛。い。ふ。國。者。と。お。の
 よ。う。と。て。う。の。若。懐。と。教。と。き。と。け。け。る。お。ま。ん。い
 大。い。信。じて。日。を。し。二。月。朔。日。貞。盛。秀。郷。れ。ぬ。お。

隆興下野の勢ともいふ。一万余千人。今。て。下野
 兵。よ。う。う。ぬ。日。と。て。ふ。若。若。昏。ぬ。う。よ。向。明。向。將。門。が
 陳。う。ね。い。て。付。べ。し。と。後。定。し。て。馬。の。鞍。と。物。の
 一。物。飼。く。休。い。ぬ。お。門。い。て。向。老。公。は。う。い。し。
 款。陸。部。う。う。い。い。と。せ。し。む。る。お。款。ら。び。と。う。う。
 若。若。若。將。門。い。う。う。い。ぬ。雜。兵。數。千。人。よ。國。う。縁
 と。も。い。て。四。方。乃。林。中。あ。る。い。い。い。の。志。者。い。い。く
 一。室。金。身。淨。國。下。野。守。お。頼。同。大。寺。宗。と。井
 今。お。平。若。ふ。千。餘。人。を。し。と。て。款。の。引。て。ゆ
 べ。と。順。路。う。お。中。に。人。ま。さ。う。も。て。は。二。向。守。い

弁書物語の如朝卷五

ゆゑにみまよひたりと云ふものも、
おぼくは、其の如く、
うよふのち、
らしめ、
とんとやまな、
をまら、
條お、
とをら、
づら、
更、

て我、
と、
を、
わ、
幾、
び、
巡、
ち、
を、
あ、

けつつあしはち射るふらへに欲せんといふは
これあまの四角八方にあげらる友大將希ありは
て引退くる物具は捨る事なるをいふとあまの
はこれ將門が軍士等自威護技等が妻女と
らえてより新室をこれをやして女が死なうくと
よと下知しけしむは由はさうさるるをいふ
くく無生等がうらなは被犯より新室自威護が
妻は衣服とあてて一着の衣をさるる
とほそく風のあまのはなを被るるをいふと
は女どもはゆるして踏入しはらうとらうとら

將門といふるは今宵の戦討は利とばしむるも
欲さゆて討まはぬ。敵はた勢濟方におちりて入る
生兵あり。廣場れ合戦ははあまうらまはは。流方の
去年の氣とゆらちるおちるは。怪く軍兵入して下総
みつりて。要害はくちて。愛に懸じ。氣にたがうて
相戦り。利あるべし。あまのうらまは。けして後引退るは
要害ふこのやうに。あまの利あるべしといふ
安房守貞世がうらまは。合戦の利は。遣はれたるは
流とかり。退く河の流は。流れおちる。いふや流方
の流軍して。氣は。懸は。戦は。て。氣は。流るる

今昔物語(新編)卷五



今昔物語(新編)卷五



巴字小退まつり、須臾は変化して万卒みおもひ、
秀郷もつらう、矢はくちりて、ゆわくれ、矢射
ゆわく、秀郷が軍士氣つらき、をくちりて、矢はくちりて、
の勢二千九百人、落失く、将門より、勝ぬとよ
ろとび、くぐらう、攻敵とらう、て、競う、心、秀郷うよ
り、ゆわく、運へ、天より、わら、矢はの、れ、う、と、い、ん、ま、ぞ
ぐ、ま、ぶ、さ、い、と、れ、く、く、て、秀郷と、さ、ら、に、討死さ
と、牙を、く、く、下知と、これ、よ、う、て、秀郷が、子、お、あ
干國、京、宮、令、市、左、面、依、形、五、井、新、野、宮、令、市、と
捨て、ふ、ま、だ、殺、よ、ま、る、る、亦、は、貞、盛、が、一、万、餘、人、よ、せ

あり、ぞ、ん、と、おも、い、て、討て、く、ら、と、た、れ、ば、あ、く、い、屋、
く、ら、ね、門、が、軍、兵、あ、ふ、く、の、あ、ま、り、と、さ、四、角、八、方、い、を、敵
と、残、り、あ、ま、り、づ、ふ、六、七、百、將、門、を、い、ま、つ、て、ま、る
く、ふ、の、く、敵、も、さ、ら、い、さ、う、た、れ、ば、下、総、國、よ、う、り、
廣、く、よ、う、と、こ、も、あ、一、書、曰、下、総、國、卒、
秀郷、退、く、ひ、て、下、総、國、よ、う、り、と、ま、れ、ば、將、門、要、害、を、
ゆ、へ、て、し、て、も、あ、貞、盛、相、く、ら、そ、の、利、あ、る、と、い、は、
や、い、風、と、よ、り、あ、ら、く、あ、ら、て、將、門、を、く、い、は、
あ、ら、く、あ、ら、り、同、月、十、四、日、將、門、を、く、い、は、
け、し、た、京、都、よ、り、加、藤、退、討、の、た、ね、也、

拾遺物語の御朝、権臣

右京大夫副右軍平兼以右京右衛門尉後任修
以下の官軍數萬人後河國まで兵のよう披露有
かれい。今もて將門のつとまをぶいする國勢も
國怖してあついでい。後任の修もい。のる兵千人
ふ多うもい。將門勇氣もあついで。甲冑も
悉く。後馬は報とついで先登と。望風陣と。後と
敗る。社のおとく。百發百中と。ふつあついで
羽成のじ。其の卷めあついで。あついで。あついで
後軍もあついで。あついで。貞感秀郷があついで
易してと。あついで。あついで。あついで。あついで。

すぞ小賊少く及びん。將門氣もあついで。一騎敵
の中に斬て入。秀郷が勢大將と。あついで。あついで
兵實方以下百人と。あついで。あついで。あついで。將門
勃然とて。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
千変万化と。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
ゆるり。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
を退還し。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
貴人。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
つと。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。
て。あついで。あついで。あついで。あついで。あついで。

昔物語の和朝

一本作秀郷
あついで。あついで。
あついで。あついで。
あついで。あついで。

され白く射しけり。此の將門、其の控將たり。其の
け幕一筋ふりつてゐるより、けり。此の將門、其の
秀郷とせしめて、將門が首瓜あまうか。一本曰貞盛
りつて將門と戦うた者、其の利と其の、秀郷いつつて、將門
將門の妻や通し、その女が、秀郷より、將門が、其の、射
りつて、將門が、其の、射
りつて、將門が、其の、射
守り、其の、相換國、をいつて、其の、
安房守與世王、上保、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、

く、三月九日、秀郷は、後四位下と授け、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
神宮雜事記 其人、其の、其の、
叙修理大夫 其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、
其の、其の、其の、其の、其の、

國使、其の、其の、其の、其の、其の、

ふれりてゆかり。聖皇太子御生掙御社に一振紀命

四世孫天忍人命之後也しつゝ畫師と内裏より免して。佐友を丸

ぶ首右近の場あり。其ありゆゑを二つは首

寫して持来とぶ。被首は清後をせとゆがせ

内裏へ入るにゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

と近る場よりて。其首は寫してなり。顔の

らありてゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

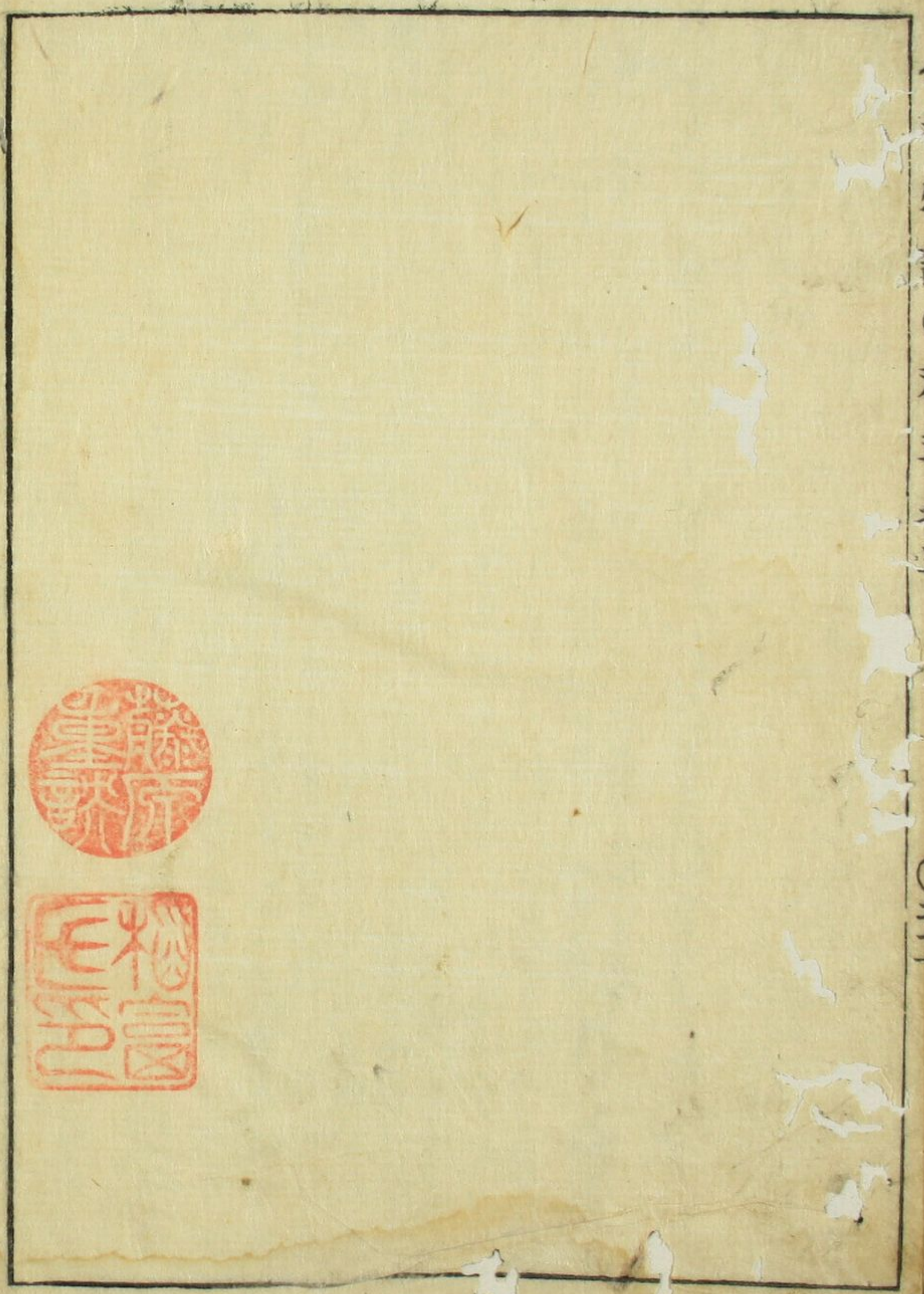
とゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

今昔物語五

平重盛三月は太極とねまつる。赤心西にけり。此
志づきりゆりてなり。日み年三月は伊勢守に奉
幣使をせしむ。神宮雜事記曰。天慶四年三月廿八日
河遠江等郡神封戸各拾烟。被奉寄太神宮。又依官首尾張三
冬賜一階是則依將門追討之御祈禱也。又七道諸國神社被
奉増位階。一書曰。將門純友亂逆の事。依八幡宮の御
くろみ之社の冥助よりてゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ
乃ゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ
書曰。此の事ゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ
ハ梅ノ守高之朝夜あり。蘇人奇人あり。十人あり。始く賀茂へ
紀業之流る奇にあり。ゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ
ゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ
ゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせとゆがせ

今昔物語(和歌集)

〇三



今昔物語

